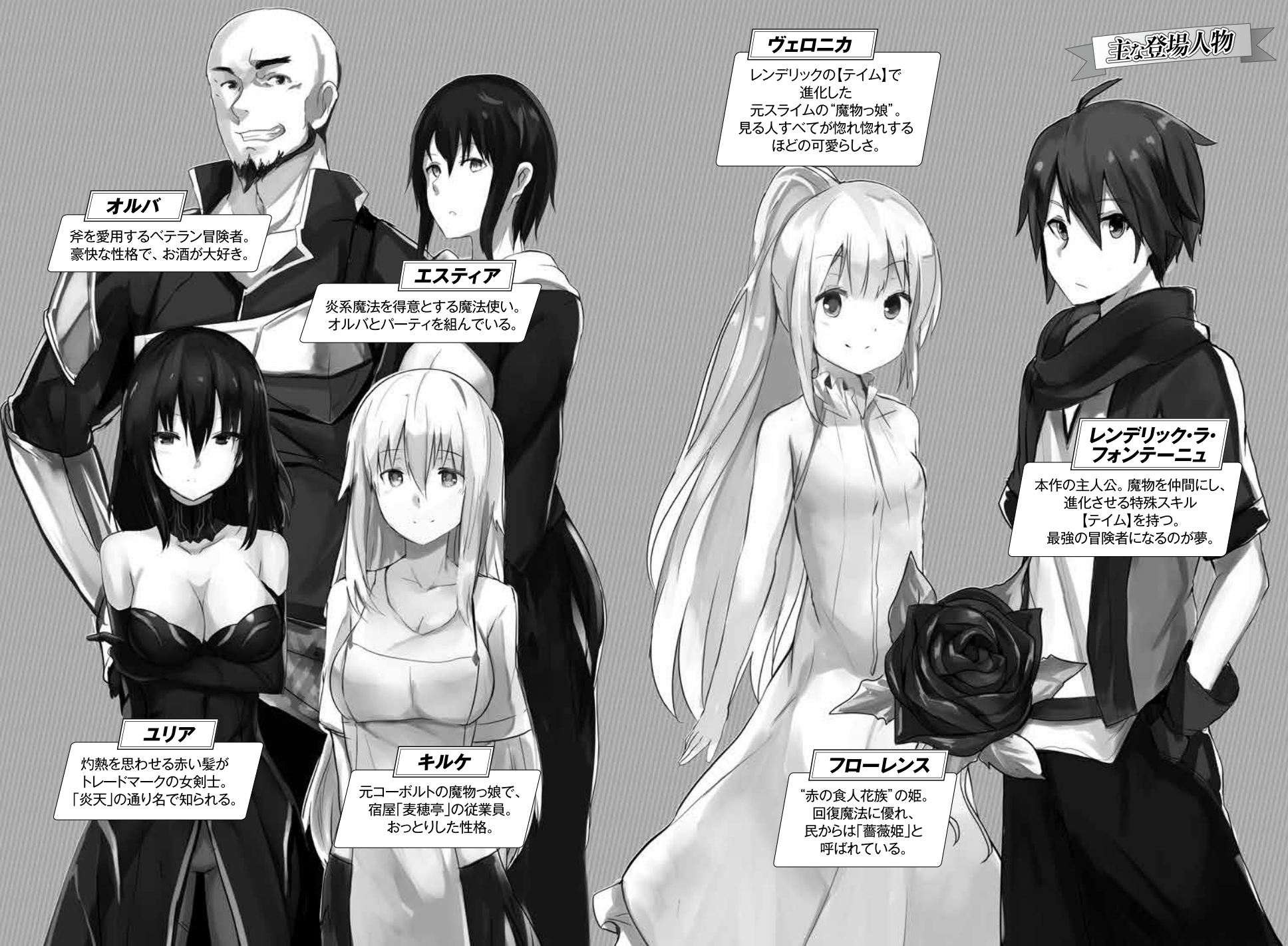
終わりなき進化の果てに
～魔物っ娘と歩む異世界冒険紀行～ 3

淡雪 融
Yu Awayuki

主な登場人物



オルバ

斧を愛用するベテラン冒険者。
豪快な性格で、お酒が大好き。

エスティア

炎系魔法を得意とする魔法使い。
オルバとパーティを組んでいる。

ユリア

灼熱を思わせる赤い髪が
トレードマークの女剣士。
「炎天」の通り名で知られる。

キルケ

元コーボルトの魔物っ娘で、
宿屋「麦穂亭」の従業員。
おっとりした性格。

ヴェロニカ

レンデリックの【テイム】で
進化した
元スライムの“魔物っ娘”。
見る人すべてが惚れ惚れする
ほどの可愛らしさ。

フローレンス

“赤の食人花族”の姫。
回復魔法に優れ、
民からは「薔薇姫」と
呼ばれている。

レンデリック・ラ・フォンテーニュ

本作の主人公。魔物を仲間にし、
進化させる特殊スキル
【テイム】を持つ。
最強の冒険者になるのが夢。

序章　薔薇は涙の種を蒔く

「フロラ、いい加減、お前は逃げろ！」
「嫌ですわ、アーデお兄様！」
夜空に浮かぶ、銀色に輝く三日月。
その光は、険しい山の地表を照らす。
月明かりが大地に映し出したもの――二つの影が、互いに向き合っている。
「僕の言うことを聞くんだ！　このままだと、お前まで奴らに殺されてしまう！」
「逃げることなど許されません！　私は『薔薇姫』なのです！　私が守らぬと言うのなら、一体誰が民を守るのですか！」
「もう遅い！　すでに民のほとんどはやられてしまった！　僕らに……勝ち目はないのだ！」
「そんなことありません！　私が、何とかしますわ！」
二つの影の言葉の応酬は止まらない。

やがて「アーデ」と呼ばれたほうが、痺れを切らしたのか、周囲に向けて怒鳴った。
「おい、エステ！　いるんだろう!?　薔薇姫を連れて、今すぐ逃げろ！」
刹那、薔薇姫の背後にもう一つの影が現れ、薔薇姫を包み込んだ。
「やめなさい、放しなさい！　私は民を守ると約束したのです！　こんなところで、逃げるわけにはいかないのです！」
しかし、背後の影は力を緩める気配がない。
「放して！　放して！　……お兄様、お願いします、私もここに残って――」
「だめだ！　お前は我々の最後の希望！　お前だけは生き延びなければいけないんだ！　……やれ、エステッ！」
直後、エステと呼ばれた影が、薔薇姫の体に針を突き刺した。
「薔薇姫様、どうか……お許しください」
薔薇姫は振り返ってエステを見上げる。
「……卑怯な……真似を……お兄、様……」
その場に崩れ落ちそうになる薔薇姫を、エステが支える。
「――終焉なる闇が世界を覆う時……」
混濁した意識の中で、薔薇姫は兄のそんな言葉を聞いた。
兄が何を言っているのかわからないものの、記憶を揺さぶられるような懐かしさを覚える。

「――薔薇の姫君、太陽の巫女となりて世界に光を照らさん。……我らの種族の古くからの言い伝えだ」
薔薇姫にそう語りかける兄の表情が柔らかくなる。
「薔薇姫……いや、フロラよ。僕たちの種族を救うことができるのは、お前だけだ。我々は、お前だけは、薔薇姫だけは、失ってはいけないのだ。……それじゃあな、フロラ。またいつか、会えるといいな」
そう言って、眼下に迫った敵の群れを見下ろすアーデ。
今、フロラは理解した。
お兄様は……私を逃がして、死ぬつもりなのだ。
泣き叫びたいはずなのに、意識はどんどん薄らいでいく。
「お、に、い、さ……」
フロラは完全に意識を失った。
エステに抱えられたフロラを、アーデが優しい眼差しで見つめる。
その視線を、彼女の背後のエステに移して、アーデは言った。
「エステ……フロラが目覚めたら、これを渡してくれ」
アーデが差し出したのは、赤々とした眩い光を放つ石。
エステは頷き、それを受け取る。

「エステ、後は任せたぞ。どんなことがあっても……フロラを守れ！　これが――俺の最後の命令だ！」

エステは、もう一度大きく頷いた。

「……承知しました、アーデ様。これまでの数々のご恩……絶対に忘れません。薔薇姫は必ず守り抜いてみせます……命に替えても！」

そこまで言うと、エステはアーデに背を向け、薔薇姫を抱えて走り去った。

遠ざかる彼らを、アーデはいつまでも見つめていた。

その類まれな能力によって「薔薇姫」と呼ばれた妹だけは――死なせるわけにはいかない。

そのためには、己の命など惜しくない。

アーデは再び、迫り来る眼下の敵たちを見下ろす。

それは圧倒的な数の大軍。

それでもアーデは、怯まない。

「薔薇姫には……妹には絶対に手出しさせん！　かかってこい！　僕が相手だ！」

直後、大波のような敵の軍勢が、アーデに襲いかかる。

――フロラ、さらばだ。

第一章　帰還

「なるほど……未知の魔物はブラッドキャップ、とな。……とにかく、討伐ご苦労であった」

冒険者ギルド・ハーガニー支部にある、ギルドマスターの執務室。

ギルドマスターのグラノイアスが、帰還したばかりの俺たち討伐隊に、労いの言葉をかける。

先発の討伐隊を壊滅させ、ハーガニーの人々を戦慄させた魔物・レッドキャップ、さらにブラッドキャップを加えた一味は、俺――レンデリック・ラ・フォンテーニュと、相棒のスライム娘ヴェロニカも参加した二次討伐隊によって掃討された。

一味が縄張りとしていた森からハーガニーの街に戻ってきた俺たちは、その足でギルドに向かい、グラノイアスの部屋に通されたというわけである。

今は、討伐隊のリーダーを務めた守備兵団団長のローレンが、討伐の内容について簡単な報告をしているところだ。

ギルドの二階にあるこの部屋に来る前、俺とヴェル（ヴェロニカの愛称）は一階ロビーにある電話から、世話になっている宿屋「麦穂亭」に連絡を入れた。

昨日は麦穂亭の女将さんの娘、ネーファと昼頃に別れてギルドに来たが、そのままレッドキャップ討伐の緊急依頼に参加することになったため、連絡を入れることができなかったのだ。
実際には、連絡を入れる「時間」はあったものの、そうする「余裕」がなかった。
昨日、ギルドにやってきた直後、俺はこの街に来て出会った友人・ワズナーが討伐隊に参加して死んだことを知った。
俺にそれを教えたのは、かつてはその才能から「神童」と呼ばれながら、落ちこぼれて今は「寝取り男」などという通り名で知られる冒険者、ゾイドである。
予想もしなかったワズナーの死に衝撃を受け、その後、グラノイアスから発表されたレッドキャップ二次討伐の緊急依頼に参加した俺の頭の中には、ワズナーの仇討ちのことしかなかった。
だから、麦穂亭への連絡を忘れてしまったのだ。
さきほどかけた電話に出たのは、女将さんだった。俺は以前にも連絡なしに一晩宿に戻らなかったことがあり、てっきり怒られるものと思ったが、女将さんは「無事でよかったよ」と電話口で繰り返すばかりで、非常に申し訳なくなった。
次は、本当に気をつけよう。
「さて……」
執務デスクの椅子に座りながら、労うように俺たち一人一人の顔を見回すグラノイアス。
無事帰還した俺たちを見るその目には安堵の色があったが、同時に、隠しきれない不安も混じっているように俺には見える。
「戻ってきて早々で悪いのだが、君たち全員のギルドカードを、今ここで読み取らせてもらってもいいかね？」
俺たちはギルドカードを取り出し、次々とグラノイアスに手渡した。
――ハーガニーに戻ってきた俺たちを待ち受けていたのは、街の人々の歓声だった。
街の出入り口である門の周囲で、大勢の人たちが討伐隊の帰還を喜んでくれているのを見て、思わず胸が熱くなってしまった。
前世で見たプロ野球の優勝パレードのような、その熱狂ぶり。四方から飛んでくる歓声と視線は照れくさくもあったが、あの興奮はクセになりそうだ。
かつて浴びたことのない黄色い声援を思い出すと、グラノイアスの前だというのに、思わずニンマリしてしまいそうになる。
……だけど、観衆の中から「可愛いよ！」とか「俺の愛を受け取ってくれ！」などという、ヴェルに対する男どもの声が聞こえてきた時には、さすがにカチンとくるものがあった。
ヴェルは渡さないからな！
「……ふむ……ふむ」
ふいに耳に届く、グラノイアスの声。
おっと、いけない、いけない。

ここはギルドマスターの執務室。ぴしっとしなくては。
グラノイアスは、俺たちから受け取ったギルドカードを、読み取り機である水晶に一枚ずつかざしては、表示される情報に目を通して一人頷いている。
俺たち帰還メンバーはその間、じっと彼の挙動を見つめていた。
「これで終わり、と。お待たせしてしまったな」
読み取りを終えたグラノイアスが、カードを一人一人に返していく。
「さて……今回の討伐の報酬と戦利品の分配だが、明朝でも構わないかな？　カード情報を見るかぎり、どうやら今回は戦利品が膨大な数にのぼるようだからね」
全員を見回しながら問いかけるグラノイアス。
俺たちは互いに顔を見合わせ、頷く。
「はい、それで大丈夫です」
代表して、斧使いのベテラン冒険者、オルバが答えた。スキンヘッドの強面兄さんだが、豪快な性格で頼りになる存在だ。
ちなみにこの「分配」の対象に、ローレンをはじめとする守備兵団のメンバーは含まれていない。彼らはハーガニーのいわば公務員のような存在であるから、その活動の対価は基本的に給料なのである。
「それで……少しよろしいですか、グラノイアス殿？」

「ふむ、オルバ殿。何かね？」
かしこまったオルバの口調に、グラノイアスが真剣な表情で問い返す。
いつもはフランクな彼らしくない口調だが、伝説級の冒険者であるグラノイアスの前だからな。さすがのオルバも丁寧な言葉遣いになるのだろう。
「さきほどのローレン殿からの報告の補足なのですが……本来であればベルガニー山脈付近にのみ棲息する魔物が、麓の森に、大量に出現しました。まあ、ギルドカードの情報でもわかると思いますが」
オルバの説明を聞きながら、顎鬚を撫でるグラノイアス。
「ふむ……続けてくれ」
「はい。これまでの周期に照らすと……『大氾濫』が、ベルガニー山脈で起きている可能性があります」
大氾濫、という単語がオルバの口から出た途端、グラノイアスを包むオーラが緊張を伴うものに変わったように思えた。
ビリビリと、室内の空気が震えるのがわかる。
その変化に俺や他のメンバーも反応し、部屋の雰囲気が、一気に張り詰める。
ふいに何かに気づいた顔をして、グラノイアスがため息をついた。すると、途端に彼のまとうオーラが弛緩していき、室内の空気がふっと和らぐ。

「申し訳ない、つい興奮してしまったようだ。……大氾濫、か。前回あれが起こったのは二十年ほど前だったな……少し早い気もするが、そろそろ起こったとしても、そこまで不思議ではない、か」

特定の一種族の魔物が爆発的に増える、大氾濫。

それはある程度の周期性を持って発生し、そのたびに、人類に大きな災いをもたらしたと言われている。

直近で起こったのは、今グラノイアスが言ったとおり二十年前。

その時はハーガニー近郊でゴブリンが大量発生し、しかもその中に、特殊進化を遂げた個体が存在したという。

目から灼熱や電撃の光線を放出するというその個体の脅威は凄まじく、当時現役の冒険者だった俺の両親――パブロとエレーネも参加して討伐には成功したものの、多数の死傷者が出たのだそうだ。

「そうですね、確かに少し早いとは思いますが、ありえない話ではないと思います。……ただ、異常なのは、複数の種族が大量発生しているという点です」

それを聞いて、グラノイアスの顔があからさまに険しくなる。

否応なしに、部屋に再び緊張が走った。

「……どういうことかね」

グラノイアスの雰囲気に圧されているのか、生唾を呑み込んでからオルバが答えた。

「ええ、我々が森で遭遇したのは……高山獅子、岩喰猿、刃翼鳥、人面樹の四種です。大氾濫は基本的に、一度に一種族のみの大量発生、という認識でしたので、これには非常に驚きました」

グラノイアスの表情は、苦悩と不安が入り混じっているように見える。しきりに顎鬚をつまんでいた指を止めて、彼は言った。

「……急ぎ、ベルガニー山脈、および麓の森に調査部隊を派遣しよう。何か、尋常ならざることが起こっているように思えるな。……オルバ殿、報告まことにありがとう。皆も今回は疲れたであろう。まずは存分に休み、英気を養ってくれ」

帰還メンバーは一礼し、順番に部屋を出ていく。ドアに近い順に、オルバ、彼の相棒の魔法使いエスティア、黒いドレスと赤い髪が印象的な旅の冒険者ユリア……と退室していった。

だが俺とヴェルは、部屋を出ていかなかった。ローレンもだ。

ハーガニーに戻る前、俺たち二人は、ブラッドキャップの拠点で見つかった「謎の瓶」のことをグラノイアスに報告するよう、ローレンから頼まれていたのである。

麓の森の、敵の拠点に残されていた、謎の瓶。これには、以前に俺とヴェルがネビュラス・コーボルトの棲み処で拾ったものと同様、生産地を示す「紋様」が刻まれていない。

俺とヴェルは、相次ぐ魔物の特殊進化の陰に、この出所不明の瓶が関係していると睨んでいた。

「ん、どうした、君たち三人もゆっくり休んで――」

部屋に残るローレン、俺とヴェルを見てそう言いかけたグラノイアスに、ローレンが切り出す。
「……ギルドマスター、実はもう一つ、報告があるのですが……」
「ほう……待ちたまえ」
グラノイアスは、椅子から立ち上がって戸口のところへ行き、廊下に誰もいないことを確かめてドアを閉めた。ローレンの口ぶりから、今からなされる報告が重大なものだと察したらしい。
執務デスクの椅子に座り直して、グラノイアスは俺たちを見上げた。
「続けてくれ」
そう言われたローレンが、俺を見てこくりと頷く。俺も小さく頷き返した。
俺は【次元魔法】のアイテムボックスを使い、ブラッドキャップの拠点から持ち帰った四本の瓶を取り出して、グラノイアスの机の上に置いた。
無言のまま、瓶の一つを手に取るグラノイアス。
「これは……あの瓶と、同じタイプのものか？　君らがネビュラス・コーボルトと遭遇した現場から持ち帰った、あの……」
何とか平静を装っているようだが、彼は明らかに動揺している。
ローレンが俺を横目で見る。説明してやれ、ということだ。俺は部屋に入ってから、初めて口を開いた。
「はい、おそらく。今お持ちのその瓶は、まあ察しはついてると思いますけど、ブラッドキャップの拠点で発見されたものです。ギルドカードの情報を見れば詳しくわかると思いますが、ブラッドキャップは、レッドキャップが特殊進化した個体と考えて間違いないと思います」
それを聞くと、グラノイアスは腕を組んで目をつむり、ぶつぶつと独り言を語り始めた。
これは、熟考する際の彼のクセだ。俺も初めて見た時は少しギョッとしたが、何度か見ているうちに、そういうものなのだと慣れた。
グラノイアスはしばらくしてから、ゆっくり目を開けた。
「ふうむ……。ネビュラス・コーボルトに、ブラッドキャップ……君らは、誰かがこの瓶を、いや、瓶の中身を使って、故意に魔物の特殊進化を引き起こしている、そう言いたいのだね」
俺たち三人は同時に頷く。
ふー、と長いため息をついた後、グラノイアスは電話機の水晶をさすりながら言った。
「そういえば、レンデリック殿、瓶の件を相談しておいた『グレーフィーダー』の知人から連絡があったよ。彼によると、やはり近年多くのドワーフが、自治領グレーフィーダーを離れて世界中に散っているらしい。よってこの瓶の製造者については、特定が困難だという。グレーフィーダーで製造されたものであれば、領外に出荷される際に何かしらの記録が残る可能性があるようだが、領外のドワーフが製作したものだとそれが残らないそうでな。領外に暮らすドワーフは非常に多いというから、一人一人しらみつぶしに調べることもできない、とのことだ」
確かに、ここハーガニーで武器屋を営むドワーフのおっちゃんも、最近は領を出る同胞が多いと

か言っていたもんな。
　特殊進化した魔物の二つの拠点で、同じ種類のものと思われる瓶が見つかったことで、とんとん拍子にことが進むかもしれないと期待していたのだが……そんなにうまくはいかないか。
　グラノイアスが、コトッ、と瓶を机の上に戻す。
「ということで……この件に関して、今日のところはここまでだ。……ともかく、三人とも、討伐ご苦労だった。とくに、レンデリック殿とヴェロニカ殿。君たちはネビュラス・コーボルトとの戦闘から間もないにもかかわらず、今回の討伐隊に参加してくれた。心より感謝する。……まあ君らのことだ、ブラッドキャップとの交戦でも、他のベテランたちに負けず活躍したのだろうな」
　そう言って微笑むグラノイアスに、ローレンが答える。
「ええ。二人とも、見事な活躍を見せてくれましたよ。レン君に至っては、四体のブラッドキャップのうち、二体をほとんど単独で討伐しましたからね」
　ほお、と目を丸くするグラノイアス。
　俺とヴェルは、恥ずかしくなって頭をぽりぽり掻いた。
「そうか、そうか。私の目に、狂いはなかったようだ」
　満足そうなグラノイアスの言葉を聞いて、俺はあることを思い出した。そして気づけば、彼に、こう聞いていた。
「あの、どうして俺とヴェルの、討伐隊参加を許可してくれたんですか？　もちろん俺たち自身が希望してのことでしたけど、参加ＯＫになったことで、『ランク昇格の事実を周囲に知られないようにする』という約束を破ることになってしまったわけで……」
　先日、グラノイアスの判断で、俺とヴェルはＦランクからＣランクへと昇格した。
「ランク」というのは、この世界における強さの格付けの指標だ。
「冒険者ランク」と「魔物ランク」が存在するが、どちらも内容は同じ。
　ＳＳＳ・ＳＳ・Ｓ・Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆの九段階に分かれていて、ＳＳＳが最高、そしてＦが最低となっている。
　ちなみにローレンはＡランクで、グラノイアスはなんとＳランクである。
　ともかく、冒険者ギルドに登録したばかりの、最低のＦランクからスタートしたルーキーが、いきなりＣランクに昇進などというのは例外中の例外だ。
　そのため、グラノイアスの指示があるまでは、昇格の事実は秘密にしておくようにと彼から言われていた。
　だから俺とヴェルがレッドキャップ討伐隊に応募したのは、言ってみればダメもとだったのである。グラノイアスが許可するかどうかは、正直わからなかった。
　それが蓋を開けてみればすんなりＯＫとなったことが、俺はずっと気になっていた。ただ、それ以上に、友人ワズナーの仇の討伐に参加できるということで頭がいっぱいで、「どうして参加を許可されたのか」については、今の今まで忘れていたのだった。

俺の質問を聞いたグラノイアスは、腹の底からという感じで、豪快な笑い声を上げた。
「ハッハッハッハ！　レンデリック殿、ヴェロニカ殿、君たちが今回の討伐隊で活躍すれば、Cランク昇格も妥当であると、他の冒険者たちに証明できるだろう？　そして実際、君らは見事な活躍をしてみせたわけだ。これでもう二人とも、名実ともにCランクだよ」
そういうことか。
おそらくグラノイアスは、ネビュラス・コーボルト出現の報を俺から聞いた時点で、重大な何かがこの世界で起こっていると感じたのだろう。
そして、仮に第二、第三のネビュラス・コーボルトが現れた場合に、それらを迅速に討伐できるよう、高ランク冒険者を増やしておきたかったに違いない。
俺とヴェルの実力は、Bランク指定のネビュラス・コーボルト撃破によって証明されている……だが、数日前に冒険者になったばかりのルーキーをいきなり、それもCランクに昇格させるというのは、あまりにも異例。他の冒険者からの、不必要な批判を引き起こしかねない。
そこでグラノイアスは、昇格の事実を内密にした上で、今回突発的に発生したレッドキャップの討伐隊へ、俺たちを参加させることにしたのだ。今彼が言ったとおり、実績によって名実ともにCランクにするために。
さすがに、ブラッドキャップの出現まで予想していたわけではないだろうが……結果的に俺とヴェルは、グラノイアスの思惑どおりに動いたというわけである。

「納得しました……ということにしておきます」
俺の言葉に、グラノイアスはもう一度笑う。
「ハッハッハ！　ありがとう、そうしてもらえると助かる。……それで、だ。大氾濫の件、およびこの瓶の調査は、引き続き私が主導で行なっていくとしよう。だが君たちも、新しい情報を掴んだ際は速やかに報告してくれ」
俺たちは頷いた。
よし、と呟いて、グラノイアスが椅子から立ち上がる。
「それでは、報告会はこれにてお開きとしよう。三人とも、本当にご苦労だった」
俺は、正直迷っていた。このまま帰っていいものかと。
……ワズナーの遺体の足に刺さっていた、短剣のことがあったからだ。
ブラッドキャップらの拠点で発見されたワズナーの遺体。その足には、魔物が使うとは思えないナイフが、深々と突き刺さっていた。
それを目にしてから、俺の中で違和感が膨らみ、いまだに拭いきれないでいた。
だが、俺はナイフのことを、オルバにも、ローレンにも、ヴェルにさえ言っていない。ちょうどナイフを目にした直後に、大量発生した高山獅子らの発見情報が伝えられたために、彼らに説明するタイミングを逸してしまった、というのもある。
しかしそれ以上に……あのナイフが何を意味するのか、自分の中で整理がついていなかった。

「……ン、ねえ、レン？」
気づけば、ヴェルが俺の名を呼んでいた。
グラノイアスとローレンも、不思議そうに俺を見つめている。
……思考に耽ってしまっていたらしい。
「あ、ああ……ごめんごめん、さあ行こう」
俺は慌てて言い、目の前のグラノイアスに一礼して、執務室をあとにした。ヴェルとローレンが続く。
部屋を出る時、グラノイアスが窓を開けたらしく、外の大通りから、人々の笑い声や、店々の勧誘の声が聞こえてきた。俺たち討伐隊が帰還したニュースに、人々は沸き立っているのだろう。
ワズナーら先発隊の敗走に誰もが震撼した昨日と異なり、今夜のハーガニーは、いつもの賑やかさを取り戻していた。
俺もひとまずは考え込むのをやめて、この祝勝ムードを楽しむべきだと自分に言い聞かせた。

†

「レン君、ヴェルちゃん、無事でほんとによかったですよぉっ。……うぅ……ひっく」
「心配かけてごめんな、ネーファ」
「ネーファ、泣かないで。ほらこのとおり、怪我もなく帰ってきたよっ！」
俺とヴェルは、冒険者ギルドを出た後、宿屋「麦穂亭」に帰ってきた。
宿の扉を開けて、チリンチリン、とベルの音がしたかと思うと――店の看板娘、ネーファがヴェルの胸に顔を埋めていたのである。
ネーファは、俺やヴェルと同じ十三歳だ。まあ、ヴェルはスライムだから、実際のところ正確な年齢はわからないんだけど。
ヴェルによしよしと頭を撫でられるネーファを見ていると、まるでヴェルの妹のように思えてくる。いつもは誰よりも子供らしいヴェルも、この時ばかりはお姉さんっぽく見えるな。
二人を眺めつつ、ほっこりしていると、誰かが俺の肩をつんつんと突く。
先日からこの宿で働くことになった、キルケだ。
彼女は、俺とヴェルがネビュラス・コーボルトに遭遇した「暗い森」で出会い、ハーガニーに連れてきた元コーボルト。つまり、ヴェルと同じ魔物っ娘である。
「おかえりなさい、レンさん、それにヴェルちゃんも」
「ああ、ただいま、キルケ」
「ただいまっ！」
俺たち二人は元気よく答え、キルケも微笑む。
ネーファが、ヴェルの胸から顔を起こし、俺とヴェルの顔を交互に見上げた。

「本当におかえりなさい、レン君……ヴェルちゃん」
ヴェルに慰められて収まった涙が、再びネーファの大きな瞳からこぼれる。
まったく、相変わらず涙もろいなあ。
俺は苦笑しながら、ネーファの髪をくしゃっと撫でる。きれいな金髪が、明後日の方向に跳ねた。
「は、はわわ……」
ネーファが慌てて髪を直しているところへ、奥の食堂のほうから、女将さんが出てきた。
「あら、帰ったんだね、おかえり！」
「ただいま戻りました、女将さん。心配かけてすみません」
「ごめんなさい、遅くなりましたっ」
ヴェルと一緒に頭を下げる。
「いいんだよ、無事ならそれでね。……にしても、昨夜、泊まり客たちが話してたけど、今回の緊急依頼、Bランク指定だったんだって？　それに参加できたってことは、あんたたち二人ともCランク以上なんだね。ついこの前冒険者になったばっかりなのに、すごいもんだねえ。あんたらきっと、大物になるよ！　……まあ、とりあえず、お疲れさま。今日はゆっくり体を休めな。腹減ってるだろ？　夕飯もできてるよ！」
夕飯、と聞いて、俺はいきなり空腹感に襲われた。思えば、朝に携行食を野営地で食べてから、今まで何も口にしていない。

ヴェルも同じく腹ペコだったようで、見れば口元からよだれが垂れている。俺が目で示すと、ヴェルは慌てて口を拭った。
ちなみにこの時初めて知ったのだが、冒険者のランクは、一般人もある程度把握しているものなのだそうだ。
冒険者というのは、一般の人々からすれば特異な能力を持った憧れの存在であり、「誰が強い」とか「誰が注目株だ」といった話題は大変好まれるらしい。
グラノイアスが俺とヴェルに昇格の事実を口外しないよう指示したのは、この辺りのことにも関係しているのかもしれない。一般人の間で「何であいつらがCランクに……？」などという疑念が湧くと、冒険者ギルド全体の信用にも悪影響を及ぼしかねないからな。
「ほら、食べるんだろ？　早く服を着替えて、食堂においで！」
腹ペコの俺とヴェルは、こくりと頷き、二階の部屋へ向かってそばの階段を駆け上がった。

「慌てなさんな。誰も取りゃしないよ！」
おかわりの皿を運びながら、女将さんが笑う。
着替えを終えて食堂にやってきた俺とヴェルは、出された料理を次々に平らげていった。
遅い時間帯だったので、食堂に他の客はいない。
テーブルの向かいの席では、俺たちの食欲に圧倒されたネーファとキルケが、ぽかんとした表情

を浮かべている。
「ふー……食った食った」
「ごちそうさまでした。美味しかったあ」
いつもの倍近い量をぺろりと完食した俺たちに、女将さんがジュースを持ってきてくれた。
「ありがとうございます……ふう、おかわり！」
俺は受け取ったジュースを一瞬で飲み干し、女将さんにコップを差し出す。
「あらま、すごいもんだね。はいはい、ちょっと待っておくれ」
厨房に戻った女将さんが、顔だけ出して声を上げた。
「ネーファ！　悪いけど裏の倉庫から何本か持ってきてくれるかい！　さっきので最後だったみたいでね！」
どうやらジュースが切れたらしい。
「あ、はい、今行ってきます！」
ネーファが立ち上がる。
「ネーファちゃん、私も手伝うわ」
そう言って一緒に行こうとするキルケに、ネーファは「一人で持てるよ、お姉ちゃん」と笑いつつ、結局二人で食堂を出ていく。
もちろん二人は実際の姉妹ではないのだが、傍から見ると、まるっきり仲良し姉妹という感じだ。

「ごめんな、ネーファ、キルケ。よろしく頼むよ！」
俺とヴェルは二人に甘えることにした。さすがに体が疲れている。
厨房から出てきた女将さんが、「ひとまずこれ飲んでておくれよ」と水の入ったコップを渡してくれた。
俺たちはそれを、ごくごく喉を鳴らして飲む。
「それにしても……キルケはいい子だよ！　料理は上手いし、掃除もできるし、愛想もいいし、文句なしだね！　どれも手際がいいし。それに何といっても、ご飯の食べっぷりが見てて気持ちいいんだよ。年頃の女の子にしちゃ珍しいくらいにね。……そういや昼だったかね、肉料理が好物らしいから、まかないに肉料理を作ってやるって言ったんだ。そしたらさ、『自分で作ってみたい』なんて言い出してね。好きにしなってあたしは厨房を出たんだけど、キルケはその後すぐ自分の部屋に引っ込んじまったみたいなのさ。てっきり厨房でするのかと思ったんだけど、部屋で料理したのかねえ――」
その時、ちょうどネーファとキルケが戻ってきた。手にジュースの瓶を抱えて。
「レン君、ヴェルちゃん、お待たせ」
ネーファは厨房に行き、キルケが俺たちのテーブルに来て、新しいジュースをコップに注いでくれた。
「ああ、キルケ。ちょうど今あんたの話してたんだけどね。昼頃さ、肉料理作るって言ってたろ？

あれ、あんた、自分の部屋に材料を持ってったのかい？」
顔を真っ赤にするキルケ。
「え？　お、女将さん、やめてくださいよ、持っていってないです」
それを聞いて、女将さんが首を傾げる。
「そうかい？　変だねえ、それにしちゃ、厨房で調理した様子もなかったから――」
顎に指を当ててそんなことを言い出す女将さんに、キルケはまごついている。
落ち着け、キルケ。
俺は顔面蒼白になっているキルケの背中を指で小突いた。
だが気が動転しているらしいキルケには、当然、俺の意図は伝わらない。
キルケは振り返り、泣きそうな目で俺を見る。
ふう、しかたない。
「何を言ってるんですか、女将さん。厨房以外で料理するわけないじゃないですか。さっき褒めてたでしょ、『手際がいい』って。きっと、パパパッと作って、片付けも完璧にしちゃったんですよ」
俺はそんなふうにキルケをフォローする。まだ俺を見ているキルケには、目で、「黙ってろよ」と合図した。
女将さんは俺の説明に、ポン、と両手を打つ。
「ああ、きっとそうだね、私の勘違いだよ！　キルケ、変なこと言って悪かったね」

どうやら納得してくれたらしい。
「あっ、そのっ、あ、いえ……大丈夫です！」
慌ててそんな反応をするキルケ。
この子のうっかりは、やっぱり危ういなぁ……。
本当のところは……自分の部屋に生肉を持っていって、そのまま食べたのだろう。
それもしかたない、キルケは肉食のコーボルトなんだからな。
「本当に悪いね、キルケ。許しておくれ」
「……あ、はい、だ、大丈夫です」
「ありがとね。じゃ、あたしは戻るよ」
そう言って厨房に戻る女将さん。
キルケの反応がちょっと遅れたのが、俺は少し気になった。
何か考えごとをしていたのかな？
すると、ふいにヴェルがキルケの顔を覗き込む。
「わっ、ヴェルちゃん、どうしたの、いきなり！」
「ううん、ごめんね？　キルケちゃん、何か悩みごととかあるのー？」
ヴェルの大きな空色の目に、キルケの顔が映り込む。
キルケは数回か瞬きをしてみせた後、両手を顔の前でぶんぶん振った。

「え、えと、大丈夫です」
「……本当に？」
「ええ、ヴェルちゃん、私は大丈夫ですよっ」
大きな声でそう言い張るキルケ。
「あ、じゃあ、私、お皿洗い手伝ってきますね！」
キルケはそう言って、逃げるように厨房に入っていく。
とりあえず――。
俺は、キルケと入れ違いでこちらに来たネーファに手招きする。
「……どうかしましたか、レン君？」
ネーファが顔を近づけてきた。
「うん、もしかしたらなんだけど、キルケが何か悩みを抱えてるかもしれないんだ。何なのかはわからないけど。機会があったらさ、相談に乗ってあげてくれないか？」
冒険者として日々外出しがちの俺とヴェルより、この宿でいつも一緒に働くネーファのほうが、キルケも何かと相談しやすいだろう。ヴェルも「お願い、ネーファ」と頭を下げる。
「え？　……はい、わかりましたっ！」
ネーファはその可愛らしい目をパチクリさせて、そう答えてくれた。
元はと言えば俺がキルケをハーガニーに誘ったので、そばにいてサポートしてやれないことに少

しばかり罪悪感もあったが……ここはネーファに甘えさせてもらおう。
「なんだい、まだそこにいるのかい？　二人ともくたびれてんだろ、早くお休みよ！　ネーファ、そこのコップを持ってきとくれ！」
厨房から女将さんの声が響いて、はーい、とネーファが返事する。
女将さんたちにお休みの挨拶をして、俺とヴェルは二階に上がった。
部屋のベッドに倒れ込むと、まもなくどうしようもないほどの眠気が襲ってきて、俺の意識は遠のいた。

†

「そんじゃ、報酬と戦利品の分配をすっぞー！」
翌日の昼前、俺とヴェルは冒険者ギルドに出向いた。ブラッドキャップ討伐の、報酬および戦利品分配のためだ。
受付カウンターで案内された一室では、オルバやエスティアたち他の冒険者メンバーが揃っていた。
中央にテーブルがあり、その上に大量の革袋と、リストのような紙が置いてある。
さっき威勢よく声を上げたオルバが、続けて言う。

「まずは、報酬金な。緊急依頼そのものの達成報酬と、レッドキャップ約二百体の討伐報酬、そしてブラッドキャップ四体の討伐報酬。さらに、その後遭遇した高山獅子らの討伐報酬だ」
そう説明してから、オルバはテーブルの革袋をつかみ、一つずつメンバーに手渡していく。
俺も受け取って、チラッと中を覗いてみた。
中身は、大金貨一枚。
「おふぅ」っと、思わず上ずった声が出てしまう。
一般的には、大金貨一枚で、平均的な四人家族が半年は不自由なく暮らせると言われる。日本円にすると、この一枚が、ざっと数百万円の価値があるというわけだ。
ちなみにこの世界では、硬貨は銅貨・銀貨・金貨・大金貨・白金貨の五種類が存在する。最上位である白金貨の価値は……途方もないらしい。貴族出身の俺でも、まだ見たことがない。
今回は命懸けの討伐依頼だったとはいえ、この金額は予想外だった。隣のヴェルも、ちょっと興奮しているようだ。
「ふふ、思わぬ稼ぎになったわね」
俺とヴェルに笑いかけてくるのは、ユリアだ。
上品なドレスを着て気品を漂わせる彼女のいでたちは、冒険者というより令嬢といった感じである。
だが人は見かけによらない。

彼女は「炎天」の通り名で知られる、凄腕の女剣士なのだから。
そのユリアの隣、部屋の隅にひっそり立つ槍使いのシルバは、革袋の中身を見もせず、黙ったままでいる。
相変わらずの無反応、そして無口っぷりだな。討伐の道中でも、彼が最初の自己紹介以外で言葉を発していた記憶がない。
まったくもって謎めいた男である。
「さて、次は戦利品……素材だ」
オルバはテーブルの紙を拾い上げ、全員に配った。ギルドが作成した、今回の討伐の戦利品分配リストらしい。
昨日機械で読み取ったギルドカードの情報をもとに、グラノイアスらギルドの運営サイドが、魔物から回収した戦利品をどう分配するかを決めたのだろう。
「えーと、どれどれ……」
俺はヴェルとともに、手元のリストを眺める。どうやら戦利品は個人ごとではなく、各人が所属するパーティごとに割り当てられるようだ。
俺とヴェルのパーティが得たのは――。
――ブラッドキャップの魔核、一つ。
――ブラッドキャップの斧、一つ。

――岩喰猿の爪、高山獅子の牙、人面樹の枝……複数。
以上である。
いずれも俺の知るかぎりでは珍しいアイテムだったが、とくに嬉しいのは、やはり魔核だ。それも今回は、特殊進化したBランク魔物、ブラッドキャップの魔核である。
スライムの魔物っ娘であるヴェルにとって、魔物の魔力が凝縮された魔核は、各種スキルのレベルアップや肉体的成長のために必要不可欠。
スキルのレベルアップに限るなら、魔物を討伐することで得られる「経験値」を積み重ねれば、実現可能ではある。
しかし、各種スキルですでにかなりのレベルに達している俺とヴェルは、そこそこの敵を倒したくらいではもうレベルアップは期待できない。
数日前にも、俺たちはCランクの鳥型魔物アイスガルーダを五十体以上討伐した。
だがレベルは、うんともすんとも言わなかった。Cランクの魔物から得る経験値でさえ、この有様である。
もちろんその時、魔核も大量に手に入れた。「経験値ではダメだったけど、魔核ならあるいは……」という期待のもと、十個ほどヴェルに食べさせてみたのだが……レベルアップは起こらず、肉体にも変化は生じなかった。
まだ四十個ほど残ってはいたものの、その時はヴェルも食傷気味だったし、魔核は魔物っ娘のヴ

ェルにとって体力回復のためのエネルギー源でもあるので、携行食として保管しておこうということになった。

そこへ今回、ブラッドキャップの魔核である。Bランク、かつ特殊進化個体だからな……否が応でも期待は高まる。何せ、同じく特殊進化個体でBランクだったネビュラス・コーボルトの魔核を食べたキルケは、瞬く間に犬型のコーボルトから人型に進化してしまったのだから。

「魔核、嬉しいねっ、レン」

目を輝かせて笑うヴェル。

「ああ、そうだな」

俺もつられて笑う。

「斧とかも、もらえちゃったね」

ブラッドキャップの、巨大な斧。

手狭な部屋には運び込めなかったようで、現物はここにはないが、俺たちの身長より遥かに大きな斧だ。はっきりいって、持っていても使い道はないだろう。

だが仮に市場に出せば、激レアアイテムとしてプレミアムがつくはずだ。大金が必要になったら売却するか、あるいは交渉などのカードに使うためにアイテムボックスで保有しておくのがよさそうだな。

とりあえず、魔核とその他こまごまとした品を受け取ってアイテムボックスに収納し、リストに

受領済みのサインを済ませた。

「ふう……」

これで一応の「討伐ミッション完了」である。それを意識すると、達成感とともに、疲労感がどっと押し寄せて、思わずため息が出てしまう。

「どうした、レンデリック？　分配が終わって、ようやく緊張が解けたって感じか？　今回の緊急依頼はけっこうハードだったからな。まあ、しばらく冒険はそこそこにして、のんびり休めよ」

オルバが、ガハハと笑いながら俺の背中を叩いた。

「はい、そうします……」

「お嬢ちゃんもだぜ、こいつの冒険欲求に振り回されねーで、休んだり遊んだりしろよな」

ヴェルはちらっと俺を見つつ、「はいっ」と元気よく返事して、笑う。

「よし、んじゃ、分配も終わったし……解散だな！」

パン、とオルバが手を叩く。

それぞれ、帰り支度をして、部屋を出ようとしたところ――。

「あ、そうそう、大事なことを忘れてた。今晩な、打ち上げでもしねーかって、エスティアと話してよ。よかったら皆、一杯やろうぜ、『火竜の酒場』で！　俺とエスティアは、夕方には行ってるからよ！」

オルバはそう言って笑った。彼の相棒、エスティアも微笑んでいる。今から楽しみなのだろう、

酒好きの二人だから。
この二人に初めて会った日も、俺とヴェルは「火竜の酒場」に連れて行かれたんだよな。ギルドと同じ通り沿いにある、ハーガニーで一番飯の美味い酒場と評判の店。客でいっぱいの店内は非常に賑やかでちょっと騒がしいほどだが、俺の故郷ロイム村にはないその喧騒が、俺は嫌いではなかった。
反応を見るかぎり、皆、参加しそうだな。……シルバは、たぶん来ないけど。
「レン、私たちも行くよね？」
ヴェルが嬉しそうな顔で俺を覗き込む。
「ああ、もちろんっ」
ぱぁっと、満面の笑みになるヴェル。
正直、まだ疲労が残っている気がするし、ワズナーのこともあって宴会気分ではないのだが……こういう時こそ、仲間たちと一緒に楽しい時間を過ごすのがいいのではないかと思った。
ワズナーだって、俺にいつまでもウジウジされたくはないのではないか。
仇は討った。ブラッドキャップは、すべて討伐したのだ。それでいいじゃないか。
彼は冒険者として、俺より経験が長かった。いわば先輩だ。その彼が、後輩の俺にいつまでも同情されることを、果たして嬉しく思うだろうか？
答えは……きっとＮＯだ。

「じゃ、一度宿に戻ろっか。酒場には、俺たちも夕方頃行こう」
「うんっ！」
オルバたちに後で行くと約束して、俺とヴェルはギルドを出た。
午後の日差しが、人で賑わう大通りを照らしていた。

†

同日、同時間帯――ハーガニー守備兵団施設の地下にある、遺体安置室。
今、ここに並べられている数々の遺体は、ブラッドキャップの拠点で発見された商人や冒険者のものだ。
その部屋の椅子に一人座る男――守備兵団団長のローレンは、自分自身に話しかけるように呟いた。
「ふぅむ……やっぱり変だねえ」
目の前のベッドに横たわる、複数の遺体。ローレンはそれらを敵の拠点で初めて目にした時、言い知れぬ違和感を覚えた。
遺体は、いずれも惨たらしく傷つけられている。
だが、ブラッドキャップの進化前の個体――レッドキャップの生態を知るローレンから見れば、

これらの遺体には、不可思議な点があった。
彼は己に向けて、もう一度呟く。
「レッドキャップどもが持ち帰った遺体にしては……『きれいすぎる』んだよねえ。本来であれば、もっと痛めつけられてるはずなんだけど……」
ふいに、誰かが部屋の扉をノックした。ローレンはそちらに目をやる。
「どうぞ」
部屋に入ってきたのは、守備兵団員の青年だった。
彼はローレンを見て、恭しく頭を下げる。
「団長、失礼いたします。たった今、ギルドマスターのグラノイアス様よりお電話がありました。急ぎの用件とのことでしたので、申し訳ございませんが、折り返しをしていただけますか」
グラノイアスから急ぎの電話？
ローレンは嫌な予感がした。
「わかった、ありがとう。すぐに行くよ」
ローレンが頷くと、若い団員は再び一礼し、出て行った。
電話機は、ここ地下階にはない。一番近いのは、地上階のロビーだ。
だが、グラノイアスからの至急の用件……であれば、自分の執務室からかけたほうがいいだろう。
ローレンはそう思った。

もう少し遺体の検分を続けたかったが、ギルドマスターの要請ではしかたない。電話を済ませて、また戻ってくればいい。
部屋を出る時、ローレンは振り返って、遺体の一つをもう一度眺めた。
ある若手冒険者の遺体。
彼のふくらはぎには、一本のナイフが、深々と突き刺さっていた。
現地で初めて見た時に覚え、今も消えない強烈な違和感……その原因の一つが、このナイフである。
悲しく、許されざる出来事が起こったのかもしれない……ローレンはふと浮かんだ、その憂鬱な考えを拭い切れないまま、遺体安置室をあとにした。

「さて、と」
自らにあてがわれた団長室で、ローレンは電話機の水晶に手をかざす。かける先は、グラノイアスの執務室だ。
水晶が、点滅を始める。
そしてすぐに、グラノイアスの顔がその球体の表面に映し出された。
「ああ、ローレン殿。折り返しありがとう」
「いえ、さきほどは外しておりました。それで、急ぎの用と聞きましたが」

こほん、と咳払いをするグラノイアス。
「うむ、実はな、ついさきほど……王都ヴェリア、および交易都市コーデポートの冒険者ギルドから、連絡があってね」
グラノイアスが言葉を切る。ローレンは再び、嫌な予感を覚えた。
「……先方は、何と？」
水晶に映るグラノイアスの表情が、にわかに曇る。
「……コーデポートとヴェリア周辺で、未知の大型魔物が立て続けに発見されたそうだ。いずれも迅速に高位ランク冒険者を向かわせ、討伐には成功したらしい。だが……」
「だが？」
そう聞き返しながら、ローレンは次にグラノイアスが何を言うのか、見当がついていた。
「昨晩の君らの報告同様……紋様のない瓶が、敵の拠点で発見されたとのことだ」
やはり……と、ローレンは思った。
「となると、これは……」
グラノイアスが水晶の向こうで大きく頷く。
「うむ、間違いない。未知の魔物の発生には、あの瓶が関係している。そして瓶は、何者かの手により、故意に魔物のもとに持ち込まれている。わかっていると思うが、これは一刻を争う事態だ。瓶の中身が魔物の特殊進化を引き起こすものだとして、それがどれほどの量、存在しているのかは不明。今、こうしている間にも、どこかで特殊進化した魔物が生まれているかもしれないのだ。もちろん、大氾濫の件もおざなりにはできん。並行して調査を進める必要がある。……これから、忙しくなるぞ」
グラノイアスの表情と言葉には、彼にしては珍しいほどの切迫感があった。
ローレンは二十年前を思い出した。
――前回の大氾濫。大量発生したゴブリンの討伐に向かう時の、鬼気迫る緊張感をまとったグラノイアスの顔。
ローレンは、己の身が引き締まるのを感じた。
「わかりました。緊急の出動に備え、兵団内でメンバーを厳選しておきましょう。こちらにも何か情報が入り次第、報告します。ギルドのほうでも、新しい情報があれば共有してください。それでは――」
電話を切ろうとしたローレンを、グラノイアスが呼び止める。
「悪いが、もう一つ、用件が残っていてな」
ローレンはため息をつき、こくりと頷く。
――結局グラノイアスとの話し合いが終了したのは、一時間後だった。
地下に戻る途中、グラノイアスとの電話の内容を振り返りながら、ローレンはまた自分に向かって呟いた。

「さてさて、忙しくなるな……」

†

「はぁ……」

冒険者マックスはため息をついた。何もできない無力な自分が情けなかった。

彼は、壊滅したレッドキャップ討伐先発隊の冒険者たちのリーダーであり、かつ、数少ない生存者の一人である。

彼を苦しめていたのは、魔物に圧倒されて敗走したという事実ではなく、同行メンバーの「理不尽な死」を目の当たりにしてしまったことだった。

彼がハーガニーに帰還したのは二日前。同日速やかに募集された二次討伐隊は、見事ブラッドキャップらを撃破し、昨晩この街に戻ってきた。

彼らの成功と無事を人々は喜び、街はにわかに祝勝ムードに包まれた。その賑やかな雰囲気は、一晩経った今現在も続いている。

マックスは、そんな賑々しい空気に満ちたハーガニーの大通りを、一人さびしく歩く。

とてもじゃないが、お祝い気分にはなれない。

寝ても覚めても、死んだ仲間たちの顔が浮かんできてしまう。

マックスは、弱い自分が腹立たしかった。

通りの喧騒から逃げるように、彼は一本の裏路地に入る。

そして、向こうに見える一軒の店をまっすぐ目指した。

通りの隅にひっそり佇む、老舗の小料理屋。

マックスは、お気に入りのこの店で、古い友人と落ち合う約束をしていた。

「やぁ、マックス、いらっしゃい」

「大将、どうも」

「……今回はお気の毒だったね。ああ、お友達なら、もう来てるよ」

常連客から「大将」と呼ばれ親しまれている店主が、奥のテーブル席を目で示す。

「ありがとう」

いつもどおり客たちで賑わう店内を、マックスは奥へと向かう。

裏路地にある地味で小さな店ながら、料理が美味いこともあって常連客が多い。

マックスが冒険者になった十年ほど前は、この店のある裏通りは治安が悪かった。

当時、先輩冒険者に連れられて店に来るたび、路地のそこいらにたむろするチンピラたちに、内心恐れを抱いていたのを今でもよく覚えている。

しかしその後、劇的に治安は改善した。父親の跡を継いでハーガニー領主になったダンドン・ハーガニーが次々と打ち出した改革のおかげだ。

ダンドンの業績は治安の分野にとどまらず、商業や文化など多岐にわたった。
結果、ハーガニーはめざましい成長を遂げ、いまだ現役のダンドンは「賢哲の領主」の異名で国内外からその手腕を高く評価されている。
だがマックスは、治安の悪さに怯えながらこの店に通ったあの時代が、懐かしくもあった。
客層が今ほど洗練されておらず、荒くれ者も少なくなかったあの頃。マックスは先輩や同期の面々と、今思えば恥ずかしくなるような、大きな夢を語り明かしたものだ。
しかし、当時酒を飲み交わしたメンバーは、もうほとんど残っていない。皆、冒険者として活動するうちに命を落としていった。
マックスは、その中でただ一人残った旧友が座るテーブルの向かいに、腰を下ろした。
「やあ、エストガルデ」
「おう、マックス。遅かったな」
彼がエストガルデと呼んだ男が笑う。手に持つジョッキの酒は半分ほど減っている。
「すまん、待ったか？」
「いや、俺もついさっきさ。……まぁ座れ座れ。大将、こいつにも酒を！」
はいよ！　と大将が返事をして、すぐに、酒がなみなみ注がれたジョッキが運ばれる。
「まあ、なんだ。とりあえず、乾杯といこう。な？　マックスよ」
「……ああ」

「……ほれ、マックス、乾杯！」
エストガルデが無理やり自分のジョッキを差し出す。
カチン、とガラスがぶつかる音。
「おい、なあ、お前も飲めって」
ジョッキを口に運ぼうとしないマックスを、エストガルデが促す。
マックスは、ジョッキに口をつけてグイと酒を流し込み――むせる。
「おいおい、大丈夫か？　一気に呷りすぎだ」
「す、すまん」
「……いや、まあ、しょうがねえよな。今回はリーダーだったんだろ？　辛えよな」
エストガルデが呟く。
この心優しい友人は、マックスの災難を労ってくれているのだ。
「今回は相手が悪かったんだ。未知の魔物じゃ仕方ない。お前が仲間の死に責任を感じる必要はないさ」
エストガルデはそう言ってくれた。
マックスはその心遣いが嬉しかった。
たとえ、それが自分の心境を万全にフォローするものでなくても。
だから今夜は甘えることにした。

べろんべろんに酔ってしまえば、鮮明に残る辛い記憶も少しの間忘れられる……そう思ったのだ。
だが、同時にこうも考えていた。
あのおぞましい記憶から逃れることは、絶対にできないのだと。
「マックス、どうしたってんだ？　酔えば酔うほど、深刻な顔になってやがるぞ」
――一時間ほど酒を飲み続けた頃、エストガルデがそう心配した。
マックスはエストガルデと何度も一緒に冒険をこなし、ともに困難を乗り越えてきた。
そんなエストガルデは、一週間ほど前からとあるキャラバン隊の護衛としてハーガニーを留守にしており、今朝方ようやく戻ってきた。
つまり、マックスの討伐隊には参加していない。
マックスは、この友人がこうして生きて自分の前にいてくれることに、心から感謝していた。
そして、自分の胸の奥にある恐ろしい秘密を明かせるのは、彼しかいないと悟っていた。
だから、マックスは決意した。
ぐいと、手元の酒を呷る。
そして――切り出した。
「なぁ、エストガルデ。聞いてもらいたい話がある」

「……なるほど。それは許せねえな」

空になったジョッキの持ち手を握りしめながら、エストガルデが呟いた。
「そう思うか？」
胸の内を吐き出したものの、マックスの心は晴れない。
「当たり前だ。仲間を盾にして、自分だけのうのうと助かる……冒険者の風上にも置けねえ」
「……だよな」
「ああ、絶対に許しちゃおけねえよ」
「だからといって……どうすればいい。今、俺に何ができる？」
マックスはジョッキを見つめる。彼のそれにも、酒はもう入っていない。
「自分で成敗してやる……ってのは、正直現実的じゃねえな。今回のリーダーはお前が任されたわけだが、戦闘の腕では奴のほうが上だろう」
「……悔しいが、そうだろうな」
「もし……もし、俺がお前なら、ギルドに告発する」
マックスは顔を上げて友人の顔を見る。
「それも考えたさ。だが、証拠がない。俺の目撃証言だけだ。ギルドが、それで調査に乗り出すと思うか？」
「どうだろうな。確かに証拠としちゃ心もとないが、奴の素行は前々から問題視されてるだろ？　案外いけるんじゃないか――あっ」

パチン、と指を鳴らすエストガルデ。
「遺体だよ、その若い冒険者の遺体があるんじゃないか？　二次討伐隊は昨夜帰還してるんだろ？　きっと現場検証も済ませてあるだろうし……だとすれば、身代わりになったそいつの遺体も発見されてるかもしれない」
マックスは、目をしばたたいた後、エストガルデの肩を叩いた。
「……それだ！　奴は、確かにあの若手の足を刺した！　遺体があれば、奴を追い詰める動かぬ証拠になるはずだ！」
「そうだろ？　明日にでも、さっそく確かめてみようぜ！　おそらく守備兵団のところだ。よし、大将、もう一杯おかわり！」
すぐに運ばれてきた新しいジョッキを、マックスは友人とともに一息で呷る。
飲み始めてから、初めて酒の味を感じられた気がした。
討伐から帰還して、ようやく……自分が生きていることを実感できたように思える。
二人はその夜、日付が変わるまで飲み続けた。
憂鬱（ゆううつ）さから解放されたマックスは、気持ちよく、べろべろに酔った。
相棒のエストガルデも同じだ。
だから、二人とも気づかなかった。
さきほど、近くのカウンターに座っていた一人の男が、席を立ったことに。

そして店を出たその男が――マックスらの話を、別の店で飲んでいた、ある人物に知らせるべく走ったことに。
その人物は報告を聞いて男を帰した後、薄笑いを浮かべて呟いた。
「……マックスの野郎。必ずぶっ殺してやる」

立ち読みサンプル
はここまで